

## CONTENTS

### 地域会だより 1

連載【隔月 全6回】「環境建築」その先へ  
第2回 -パークレーからの学び- 2  
川島 範久

支部総会講演会報告:常滑のレジリエンス  
山田常滑市副市長の基調講演から 4  
宮坂 英司

静岡発 2023年度総会記念講演会  
“「環境建築」その先へ”を連載中の川島範久氏 講演会 5  
高島 ゆかり

三重発 2023年度通常総会 記念講演会  
「村野藤吾の建築 ~志摩観光ホテルを中心に~」笠原一人氏 講演会 6  
高瀬 元秀

寄稿:続・家康 × 原風景 = 富士山  
~家康の原風景は、死してもなお霊の中に生き続けた~ 7  
塩見 寛

連載:コンペ・プロポーザルのありかた ④  
~西尾コンペ1次審査結果速報~ 8  
脇坂 圭一

TOPIC:「羽島市役所旧日本庁舎の  
利活用を考えるシンポジウム」開催 9  
堀田 典裕

私のとっておき 21  
変わりゆく景観 10  
中西 暉

自作自演 258  
number 10  
花井 秀哲

保存情報 第259回  
データ発掘:庄内用水路の活用 中井筋 11  
塚本 隆典

編集後記 11  
川本 直義・降旗 範行

JIA建築家大会2023東海in常滑:開催記念特集 03  
同じ場所には戻らない円環をデザインする。  
常滑を「紫」でデザインする。 12  
黒野 有一郎

色彩からのコンステレーション  
常滑陶芸研究所の紫 13  
谷野 大輔

## 地域会だより 今後の予定

### ■JIA東海支部

- ・8/10 会員集会「登録建築家資格制度について」
- ・9/1 第3回支部役員会

### ■JIA静岡地域会

- ・8/3 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)
- ・8/3 第1回JIA塾  
(協力会員による発表「エクステリア」について)(WEB同時開催)
- ・8/18 第1回建築ウォッチング「八ヶ岳・小淵沢に佇む建築と自然探訪

### ■JIA愛知地域会

- ・8/10 第3回役員会
- ・8/10 暑気払い
- ・8/25~27「お店をつくろう!~ちいさなまちづくりプロジェクト~」

### ■JIA岐阜地域会

- ・8/22 第4回役員会 18:30~20:30

### ■JIA三重地域会

- ・8/4 第3回役員会 対面・オンライン併用  
第2回例会、会員研修会①  
「企業・現場から学ぶ~法人協会との意見交換会~」  
納涼会

### 予定変更のお知らせ

岐阜地域会で7/22に予定されていた「JIAの窓:講演会」ですが、諸事情により延期となりました。日程は改めてお知らせ致します。

## Bulletin Board

### ご案内

### 『会員集会』開催のお知らせ

佐藤尚巳会長は、先の支部総会開催の折に現在の登録建築家資格制度を見直し、新しい資格制度を創設する意向を示しました。資格制度はJIAの根幹のひとつですので、佐藤会長を招き広くその内容を知り今後の議論に活かしていただく機会です。ご多忙のことは存じますが、多くの会員の皆様の御出席をお願いいたたく、ここに御案内申し上げます。

- 日時 2023年 8月10日(木) 16:00 ~ 17:30
- 会場 ラグナスイート名古屋 + zoom オンライン配信
- 概要 テーマ「資格制度のこれから」  
○佐藤 尚巳 会長から説明  
○南 知之 本部職能・資格制度委員会委員長からの説明  
○会員による意見交換

会場参加のお申込みは終了しましたが、zoomオンライン参加は8月7日まで受け付けております。ご参加希望の方は、『お名前』『メールアドレス』を明記の上、『会員集会にWEBにて出席希望』と添えて、以下まで送付ください。

### ■公益社団法人 日本建築家協会 東海支部

FAX: 052-251-8495 Mail: shibu@jia-tokai.org

## 表紙 常滑の景色……⑤「伊勢湾-セントレア沖」

常滑の発展において、伊勢湾の役割はとても大きい。六古窯の一つである常滑は、平安時代末期から窯業が始まり、中でも大きな甕などを生産していた。ここには約500万年から150万年前に東海湖という大きな湖があり、そこに堆積した土は、焼成温度が低くてもよく締め固まり、水に強いこともあり大きな焼き物に適していた。これらの大きな甕を伊勢湾航路により東北や九州、日本全国に運ばれ、常滑は窯業産地として名を広めていく。写真は春、福岡からセントレアに降り立つ時、伊勢湾に小さな漁船がいくつか見える。



浅井 裕雄 (JIA愛知)  
裕建築計画

# バークレーからの学び

## バークレーとの出会い

東日本大震災を経て、「サステイナブル建築デザイン」というものがわからなくなり途方に暮れていたとき、大学時代の先輩に誘われて、東京で2011年6月に開催された国際ワークショップ「ARCHITECTURE.ENERGY.2011」に偶然参加することになった(図1)。このワークショップのオーガナイザーはカリフォルニア大学バークレー校(以下、UCバークレー)教授のデナ・バントロックで、同大学教授でありロイス+ウベローデ(LOISOS+UBBELOHDE, 以下L+U)という建築環境デザイン事務所を主宰するスーザン・ウベローデとそのパートナーのジョージ・ロイスが主な講師だった。

バークレーには、UCバークレーとローレンス・バークレー国立研究所(以下、LBNL)があり、建築における省エネルギーと快適性向上の実現のための具体的な方策とそのシミュレーション手法に関する研究が、世界でもっとも進んでいる場所のひとつだ。LBNLは、これまで環境解析のためのソフトウェアをいくつも生み出してきており、近年の代表的なものとしては、光環境シミュレーションのソフトウェア「Radiance」がある。また、エネルギーモデリングのソフトウェア「EnergyPlus」の開発にもLBNLは大きく貢献した。どちらもオープンソースとして公開されているのが特徴だ。そして、L+Uは、これらのソフトウェアを駆使して建築環境デザインの実践を行ない、実践でのフィードバックによってソフトウェアを進化させたり、自らも解析プログラムや評価指標を開発したりもする、ユニークな事務所である。

彼女らは、原発事故以降の日本では、建築における環境・エネルギーの重要



図1: ARCHITECTURE. ENERGY. 2011 & 2012 ポスター

性は一層増していくという認識のもと、カリフォルニアのサステイナブル建築デザインの手法を日本の未来のために伝えたいという思いから、日本における若手建築家向けのワークショップを企画・開催したのだった。そこで、私には、彼女らによるレクチャーやワークショップに参加しているうちに、彼女らのもとで学び直し、サステイナブル建築デザインについて改めて考えたいという希望が湧いてきた。そこで翌年には日建設計を退職し、UCバークレーに客員研究員として留学し、デナの元で研究活動をすると同時に、L+Uの元で設計手法の修得と実践活動を行うことになった。本稿では、カリフォルニア留学から得た大きな二つの学びを紹介する。

### 学び①

#### 自然と繋がるための環境シミュレーション

私は、L+Uで解析・フィードバック手法を学びながら、実際の設計プロジェクトも進めた。そこで気づいたことは、ソフト

ウェアを用いた環境解析は、必ずしも数値目標を達成するためのものではないということである。光・風・熱・エネルギーといった環境事象を、ソフトウェア等を用いてヴィジュアル化し、設計にフィードバックする感覚は、設計者がスケッチや模型やCGを作り、案の現状を把握し、次のスタディへフィードバックするのと非常に近い。もうひとつ、L+Uから学んだ重要な点は、快適な温熱環境または光・視環境を少ないエネルギーで実現するために、機械設備に頼る前に、自然のエネルギーを最大限活用すべく環境シミュレーションを駆使しているということである。L+Uによって開発・提案されたThermal Autonomyという指標は、年間の温熱環境評価のための指標であるが、年間在室時間のうち、空調機を用いずにパッシブな手法のみで達成される快適時間の割合を評価するものだ。また、L+Uが昼光利用デザインの評価の際に用いているDaylight Autonomy(DA)という指標も、年間在室時間のうち、昼光だけで目標照度を達成でき

る時間割合を評価するものである。これらはともに365日24時間変化する自然との「繋がり」を評価するものであり、これらはコンピュータを活用してこそ計算可能なものである。コンピュータを用いた環境シミュレーション等の技術は、自然との繋がりを適切にデザインし、ドライトルな環境を構築するためにこそ活用すべきなのではないか。この気づきは、その後の私の建築環境デザインのスタンスを決定づけた。

## 学び②

### 環境時代の新たな社会システムのデザイン

さて、こうしたビジネスを展開する事務所は日本ではまだ多くは見られないが、それはなぜだろうか。私はUCバークレーの客員研究員としてデйна・バントロック教授の元での研究活動を並行して行うことで、L+Uのようなビジネスモデルが成立する背景にはカリフォルニアの環境政策をはじめとする社会システムがあるということを学んだ。

アメリカ・ブッシュ政権は2001年に京都議定書から離脱し、以後のアメリカにおける環境政策を後退させた。しかし一方で、州は気候変動に対して連邦政府よりも積極的に行動を起こしてきており、そのなかでリーダーシップをとってきたのはカリフォルニア州だった。アメリカ合衆国の一人当たり電力消費量は1973年から1.5倍に増加したのに対して、カリフォルニア州ではほぼ変化がないという事実が、カリフォルニア州の特異性をよく表わしている(図2)。

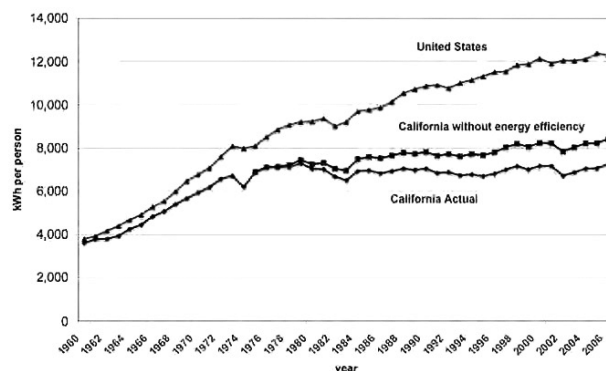
カリフォルニアの環境政策で特徴的なことのひとつに、電力会社の売上と利益を分離する「デカップリング制度」が挙げられる。これはエネルギー供給側に対する規制であり、1982年にカリフォルニア州公益事業委員会(CPUC)主導で、全米で初めて実施された。あらかじめベースとなる電気料金と料金収入見込みを定めておき、実際の料金収入が想定を下回った場合には電気料金を上げ、減少分を補填し、逆に実際の料金収入が想定を上回った場合には、電気料金を下げ、増加分を需要家に還元するというものである。これにより電力会社は電力をより多く販売しても利益増加にはつながらなくなり、利益増加のために発電コストを削減しようとするインセンティブが働かなくなっている。発電コストを削減するために、建築設計者に省エネルギー性の高い建物を設計してもらうことも重要と考え、設計者を対象とした教育プログラムや、設計支援ツールの開発や機器等の貸し出し等を電力会社が積極的に行っているのである。

規制や評価制度も特徴的だ。カリフォ

ルニア州は、かつてから国内でもっとも厳しい環境規制を敷いてきており、カリフォルニア州の建築基準である「TITLE 24」では、建物と設備に関する高い省エネルギー性能の達成が義務づけられている。アメリカのグリーン・ビルディング認証システム「LEED」の取得もインセンティブのひとつとなっており、近年では、人々の健康やウェルネスの観点から建築や街区の環境性能を評価する「WELL」も大きな広がりを見せている。以上のように、カリフォルニアは環境政策において、多くのマンドトリーな制度を推進しており、現在ヴォランタリーな制度も徐々にマンドトリーなものに移行させようとしているのである。

環境シミュレーションをはじめとする技術がどれだけ進化しても、それによって実現できることの価値が広く共有化され、その実現に対するインセンティブのある社会システムを構築しなければ意味がない。そう考えると、日本は技術よりもむしろ、社会システムについての方が多くの課題を抱えているのではないかと、という問題意識を得た。

図2: アメリカ合衆国とカリフォルニア州の一人当たりの電気使用量



川島 範久 KAWASHIMA Norihisa

建築家。川島範久建築設計事務所代表取締役。明治大学理工学部建築学科准教授。1982年生まれ。2005年東京大学卒業。2007年東京大学大学院修士課程修了後、日建設計勤務(-2014年)。2012年、UCバークレー客員研究員。2016年東京大学大学院博士課程修了、博士(工学)取得。2017年川島範久建築設計事務所設立。

明治大学 准教授  
川島範久建築設計事務所 代表取締役  
建築家 川島 範久



# 常滑のレジリエンス

## 山田常滑市副市長の基調講演から。

●開催日:2023年5月31日



ここ数年間。人と人のつながりが途絶えました。所謂新型コロナの影響を受けて、2020年から様々なイベントが中止となり、人と人の交流が制限されていました。2年近くもそのような状況ですから、良くないことにそれに慣れてしまい、イベントとはいかなるものかを少し忘れかけています。リモートという言葉やZOOMにも慣れ果て、人と人の交流とその楽しさの記憶が若干遠のいてしまっているのは私だけではないと思います。そんな中、いよいよ東海支部が中心となり、建築家大会が2023年の秋、ここ愛知で開催されることになりました。

今回の会場は、「常滑市」。この場所は何度も足を運んだ、とても身近な場所です。

1つはセントレア。愛知の空港の拠点です。ここから何度も海外に出かけています。空港の目の前の駅が常滑。ここにくると飛行機に搭乗する前の少しの緊張と、大きな愉しみに満ちる場所です。

もう1つは、常滑のまち歩き場所。好きが高じて古物商の資格も取得したくらいですので、焼き物散歩道には何度も来ております。また昨年開催のあいち芸術祭においては、やきもの散歩道を中心に古い建物が展示会場となっていましたから、もちろん足を運んで展示された作品やインスタレーションのみならず、古い建物を堪能して帰りました。

そんな場所で、JIA建築家大会が開催されるのは、とても楽しみであるわけです。

久々に、対面で開催された東海支部・愛知地域会の総会において、常滑市の副市長、山田様が基調講演をさせていただけるとの事でした。5月8日からマスク着用が任意となり、勿論



常滑市副市長 山田氏

コロナウィルスは存在している訳ではありませんが、若干の自由と開放感を感じつつ、副市長のお話を聞きすることができました。

題名は、「常滑のレジリエンス」レジリエンスとはあまり聞きなれない言葉ですが、調べますと回復力。しなやかさ、弾性を意味する言葉のようです。まさにいま、コロナからのレジリエンス。回復の時期かと思いつつ、お話を聞かせて頂きました。

やきもの散歩道でもとても目立つのは、道路の脇にある土留め代りの常滑焼。土管だったり瓶だったり、レンガのようなものをうまく利用して、擁壁のようにしています。これも私たち外部の人間からするととても珍しい景色ではありますが、住んでいる皆さんからすると特別なことではないようです。海外の方々もよくカメラに収めている姿を見かけます。

建物の外壁などにも、多く焼き物が使われているのを見かけます。陶板の外壁やスクラッチタイルなど、地元の名産である焼き物をいろいろな場所で見ることができるのも常滑の良さだと思います。

今回の大会のテーマは「環る」。そのテーマから山田副市長は、人→自然→産業→生活→まち・むら→文化・風土→人へのサークル、輪を想定されてお話を進めて行かれました。

そのサークルの中心は一体何なのか。まずは常滑焼の歴史から紐解いて行かれました。

常滑焼は約1000年の歴史があるそうで、日本の中心である東海地方から西日本(岡山)あたりが、日本六古窯といわれる歴史ある焼き物産地に数えられるとのこと。愛知の場合は、瀬戸焼と常滑焼の2大産地があり、常滑は比較的大きなものをつくるようになったとのこと。水が漏れにくいという特性から、下水用の土管も多く生産されたそうです。近代になると、フランクロイドライトの建築に用いるために、常滑で外装レンガを焼いたり、建物の外装を飾った様々なタイル、レリーフ、レンガなども常滑で生産されたりと、日本の建築文化の一端を担ってきた場所であることもお話しさ

しました。いまでも、リクシル・イナックスは常滑にありますので、我々建築を生業にするものにとっては、非常に重要な場所であることには変わりはないです。便器などの生産のために、一時期はスズメが真っ黒になるほど、大気汚染がひどかったともお聞きしました。個人的に興味深いのが、私の住む一宮市の墨会館(丹下健三設計)の外壁テラコッタも、常滑での生産だったことです。わたしの住まいからほど近く、とても好きな建築の一つでもあります。

さて、話は戻って、先ほどのサークルの中心は何なのでしょう?

先だって、常滑市役所が新しく建築されたそうです。そのいろいろな場所に、常滑の焼き物を使用したそうです。常滑でつくられた甕を市長応接室からみえるところに飾ったり、昔は市役所などでよくみることのできた陶板壁画を新しく設置するなど、焼き物にかなりフューチャーしているということでした。外壁に使われているスクラッチタイルには、こどもたちのメッセージが書かれているなど、常滑らしいしつらえをそこそこに、演出されていることに大変驚きました。

山田副市長は、はっきりとサークルの中心は何か名言されませんでした。今回常滑市で全国大会が開催され、そこでぜひそれを発見してくださいとのことばでお話を締めくくられました。

私は、常滑のレジリエンスのサークルの中心は、人であり常滑焼であり、さらに山田副市長のような、常滑の人と産業に十二分な知識のある方が中心なんだろうなと思いました。

全国大会に訪れる建築家は、この場所に立ち何を感じるのでしょうか?私はとても興味があります。今回、微力ではありますが全国大会の盛会に協力していきたいと考えています。



宮坂 英司 (JIA愛知)

アトリエ創一級建築士事務所

# “「環境建築」その先へ”を連載中の川島 範久氏 講演会

●開催日:2023年 5月15日

コロナ禍明けの静岡地域会の2023年度総会記念講演会は、2023年日本建築学会著作賞「環境シミュレーション建築デザイン実践ガイドブック」を受賞した川島範久氏にお願いした。自然とつながる建築をめざして、環境の視点から計画を見直すという、現在の建築界では外すことができない大義名分である。ただ私は、時々疑問に思うが、それは表面だけの表題でこれが本当にエコなのか?本質的にそのものの建築だけでなく、人、環境、大きな地域社会、それを超えた普遍的に大切な建築の本質を考えているのかと思ってしまうのだが、川島氏の内容はそれを超えた所にあった。頭の回転の良さが垣間見えるキレキレの話で、話を聞くのにいっぱいいっぱい私だったが、そんな中で思ったのは、川島範久氏は、ただの流行の建築家ではなく、考え方がとても健全で、健康で、これからの建築家の代表となっていく人だろうと素直に予感した。

講演のはじめは、「環境シミュレーション建築デザイン実践ガイドブック」の説明で、これに関しては前々回のARCHITECT6月号を皮切りに、連載で6回、川島氏本人が書かれるので、私が敢えて書く必要はないので、割愛したい。

川島氏の設計手法は、見えないエネルギー性、太陽光、自然風、温度の計算は、PCソフトを駆使し、可視化し、建築環境を設計

することがメインであるが、それだけではない。建築材料(物質)の耐久性、機能として、その建物を使う人にとって使いやすいこと、時代の要求に合わせて変更性があること、その地域の文化を考えながら、今後愛され続けていく建築であることである。私が講演を聴いて、一番印象に残ったPJは、名古屋市に改修した“GOOD CYCLE BUILDING001 | 浅沼組名古屋支店改修PJ”である。既存建物の改修で、まずはその地域にある資源、建築社会の問題を人の手で、改修したことである。

建築残土は、2年前の静岡県熱海市の伊豆山の土石流災害でも問題になったが、建築の厄介ものの建築残土を再資源化したことである。建築残土は正直様々なガラが混ざっているので、再資源化と言っても簡単ではない。川島氏は船頭にして、社員の皆さんでふるいに掛けるというかなり面倒な作業である。循環型社会を謳うならば、それこそがサステナブルなことである。集めた土は、セメントを混ぜて、塗り壁にする。これも浅沼組の社員で行うワークショップで行い、味わい深い壁になる。これもプロの左官屋が施工した訳ではないので、精度や耐久性に寛容になり、もし破損しても自分達で直していこう。オフィス内部もカーテンウォールの窓から住宅のように気軽に開閉することが出来る窓に変えた。エ



レベーターも2基から1基に変えて、階段はソイルペイントでグラフィックにして、上り下りが楽しくなるような階段にした。外部階段も植物を植えて、外ならではの楽しむことができる階段にした。

きっと浅沼組の社員の皆さんは、大変だったと思うが、同時に建築中は楽しい時間で、完成した今も幸せな時間を過ごしていると思う。愛され続ける建築であり、建設を担うゼネコンにとって大きな刺激になったのではないだろうか。

川島氏がバークレーで学んできた「サステナビリティに関する情報や技術は、より良い世界の実現のために広く社会でシェアさせるべきもの」の言葉にあるように、川島氏は技術を越えた部分のサステナビリティの精神を建て主である浅沼組の社員の皆さんに広めた気がする。

出来れば講演だけでなく、静岡地域会で企画し、浅沼組名古屋支店の見学に是非とも行き、建物を見学すると共に、社員の皆さんの幸せな声を聞きたいと思った。最後に、これからの環境配慮型の建築は、机上やPCの上だけでなく、川島氏のような建築家の熱いエネルギーを行動に移すことで、新しい環境配慮型の愛され続ける建築が生まれていくのだと思う。



高島 ゆかり (JIA静岡)  
一級建築士事務所アトリエ結



## 「村野藤吾の建築 ～志摩観光ホテルを中心に～」

- 講演者：建築史家：笠原一人 氏
- 開催日：2023年 4月 27日



▲ザ・クラシック外観 撮影：笠原一人



▲カフェバー リアン内観

4月27日、通常総会がレストラン東洋軒にて対面で開催され、村野藤吾を研究されている京都工芸繊維大学の建築史家、笠原一人先生にご講演いただきました。JIA三重では通常総会は代々東洋軒で開催しており、総会が対面で開催されるのは4年ぶりで、記念講演会も4年ぶりとなります。

村野といえば日生劇場や目黒区総合庁舎、箱根プリンスホテルなどが有名かと思いますが、三重県では志摩観光ホテル、近鉄賢島駅など近鉄グループの建物を多く手がけており、現存するものもいくつかあります。その中から、志摩観光ホテルにスポットを当て、戦前・戦中・戦後と歴史の流れとともにお話いただきました。

村野と三重県のつながりは、日本軍からの依頼で設計し1942年から44年にかけて建築された津市香良洲の三重海軍航空隊の士官舎、武道場など一連の軍施設に始まり、1944年には鈴鹿市平田に鈴鹿海軍工廠第一会議所(海軍将校倶楽部)を建築しています。



▲記念講演会 東洋軒にて

戦中で建築どころではなかったであろう設計事務所が、軍の仕事で食いつないでいた側面を垣間見ることができました。

やがて終戦を迎え「国定公園の指定を受けた志摩地域に洋式ホテルを！」と三重県からの依頼で志摩観光ホテルは計画されますが、戦後の物資が乏しい時代だったこともあってか、一部は海軍将校倶楽部を移築転用し、1951年に営業を開始しています。

現在の志摩観光ホテルのザ・クラブ(カフェバー リアンにあたる部分)は1951年の意匠を保存継承していますので、移築転用されたことを考えると1944年の海軍将校倶楽部をしのぶことができるということになります。

その後、増築するかたちで1969年に新館(ザ・クラシック)が完成しています。志摩観光ホテルと言って、誰もが頭に思い浮かべるのはこのザ・クラシックの外観だと思いますが、雁行型配置にし、各階に庇をめぐる縦方向のスケール感を抑え、塔屋にも二重三重に屋根をかけるなど、数々の意匠的配慮により中層ホテルでありながら英虞湾の景色と調和がとれていることが理解できました。

また、内観ではロビー天井にみられる大和張り、階段手摺のディテール、レストラン・メールの華やかな空間を演出している天井や家具など、細部にわたり村野デザイ

ンの特徴を解説いただきました。

その後も晩年まで三重県に通い続けたであろう村野ですが、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に保存されている村野事務所の図面から、志摩地方でのアンビルドのホテルの計画図や、未確認の図面まで、秘密の宝物を見せていただくような講演で、会員一同大いに沸き、私も村野建築に魅了され勉強し直さなければと刺激をいただきました。

このレポートをまとめるにあたり、志摩観光ホテルに泊まったのはいつだったろうかと調べてみたところ、サミット直後の2016年でした。そのときは村野建築の知識も空間理解力も足りていなかったようで、もったいないことをしたと後悔の念に駆られます。今回よい機会をいただいたので、復習がてら志摩観光ホテルに泊まってみようかと思っています。いや、さらなる知識を得るために、背伸びして都ホテル佳水園でもいかもしれません。

高瀬 元秀 (JIA三重)  
タカセモトヒデ建築設計



# 続・家康 × 原風景 = 富士山

～家康の原風景は、死してもなおお霊の中に生き続けた～

徳川家康は1616年、75歳で亡くなる間際に側近を集めて遺言したと『本光国師日記』（1610～1633）に記されている。この日記は、家康が1608年に駿府に呼び寄せた京都南禅寺金地院の僧・以心崇伝が書き遺したものである。

その日記には、家康本人が言ったという死んでからのこと4つが記されている。

## ①臨終候はば御体をば久能へ納

（自分の遺体は駿河の久能山に葬る）

## ②御葬禮をば増上寺にて申付

（江戸の増上寺で葬儀を行う）

## ③御位牌をば三川之大樹寺に立

（位牌は三河の大樹寺に納める）

## ④一周忌も過候て以後、日光山に

小き堂をたて、勸請し候へ

（一周忌が過ぎてから日光に小さな堂を建て勸請=神仏の分霊を迎えて祀れ）

この遺言の中に場所を示す地名等は、久能、増上寺、三河大樹寺、そして日光の4箇所あるが、私が問題にしている「富士山」はどこにも見当たらない。さて、富士山はどこに隠されているのだろうか。

①と④に注目してほしい。遺体は久能山に納めて1年後に日光に分霊を祀れ、と言っている。久能山東照宮から日光東照宮へ分霊が放たれる、というのである。この①久能山から④日光の位置を線で結んだラインが右図に示したものである。少しの狂いもなくライン上に富士山の頂が存在する。

手持ちの日本地図に定規を当てて見た時、久能山と日光を結ぶ定規の線に、富士山の頂上がまさに確実にあった。これにはビックリした。家康は死してもな

お富士山を自分の霊の中で生きた存在にしていたのか。

家康が生きた時代の富士山は、まだ宝永の噴火の前だから、現在のような中腹にえぐれた宝永火口のない、また深い傷口のような大沢崩れもない、今よりもっと秀麗な姿だったに違いない。家康の霊は、その富士山を遠景から麓に近づき、そして大きな噴火口を真下に仰ぎ、日光へと一直線に飛んでいったのだ。想像してみよう。インディジョーンズか、ハリポッターか、映画のシーンのような光景が目に見えてくるではないか。

家康の原風景が富士山だったとする考えは、家康本人が書き物などに書き遺しているわけではないし、駿府の町割りが富士山を視野に入れて計画したのだと家康が言ったわけではないから、論理的な話しではない。また今回みてきた家康の遺言の中に富士山という言葉は入っていないから、家康がそこまで富士山を意識したかどうかは、まったくの想像の域を出ない。

しかし、8歳から19歳まで今川家の人質として駿府で暮らしたことは事実であり、富士山が毎日の生活の風景のなか存在していたことは否定できない。美しい風景、美しい富士山が家康の意識の中にずっと長く、生涯、そして死してまでも存在したということは、まったく嘘ではないと思うのだ。

桑子敏雄は『風景のなかの環境哲学』において、「風景はローカルな身体空間の相貌であるから、人の履歴と結びつけて考えるとき、人間にとって人生の豊か

さとは何かが見えてくる」と述べ、人の生きた風景とその人の本質を理論づけようとした。家康は幼少年期に駿府の街の原風景の中で暮らしたことが人生のうちに成し遂げた大きなことに深い関わりをもって生涯を終えたのだと思いたい。



久能山—富士山—日光—江戸の位置関係



日光東照宮陽明門と北極星

余談を一つ。遺言の②と④を結ぶラインは、増上寺から真北の線である。上図の如く日光東照宮陽明門の真上には常に北極星が輝いている。家康は北極星を背に江戸を見守る「神」となったのだ。

### 【参考文献】

「本光国師日記」国立公文書館所蔵資料特別展  
桑子敏雄『風景のなかの環境哲学』  
2005.11 東京大学出版会

塩見 寛

Kei\_machizukuriネットワーク 代表  
NPO法人くらしまち継承機構 理事



## ～西尾コンペ1次審査結果速報～

# 課題に対する問いの設定とその乗り越えの先に

「西尾市生涯学習センター（仮称）設計者選定設計競技」（以下、西尾コンペ）の一次審査が6月17日、開催された（西尾市役所内にて非公開）。西尾コンペは2021年度よりJIA東海支部が西尾市を支援するかたちで併走し、すすめられている。同コンペは、老朽化した既存施設である「中央ふれあいセンター」と「にしお市民活動センター・アクティにしお」を集約・複合化して、別敷地に新築する事業で、北に西尾歴史公園、東に西尾幼稚園と西尾公園、西に二の沢川で囲まれた三角形の敷地形状である。生涯学習施設として一般的な「貸室」「多世代交流広場」に加えて、既存施設に整備されている「あゆみ学級にしお」「子ども・若者総合相談センター コンパス」「多文化ルーム KIBOU」といった現代社会において困難を抱える市民を支える地域施設として重要な役割を担う。基本方針として「多様な個人の共存」「歴史文化・自然環境との調和」「持続可能性への配慮」が掲げられ、敷地面積約8300㎡、延べ床面積約2600㎡、工事費18億円強（外構込み）、供用開始R9（2027）年4月として、公募が開始された。

西尾コンペは、1) 公募型設計コンペ形式、2) 公共施設の実績を問わない応募資格、3) 行政職員を含めず、コンペ・プロポーザルの経験・知見を有した建築家・建築計画者による選定委員、以上の点で意欲的な

事業である。とりわけ、公共施設プロポーザルでありがちな「同種同類用途で同等規模以上の設計業務を過去数年以内に実施した経験」など、若手建築家にとってハードルの高い資格要件を設けずに、「公共建築設計の受注実績を有すること」としながらも、但し書きで「JIAの登録建築家の配置により同等とみなす」としたことで、純粹に案としての評価が可能となった。現在、日本の公共施設の設計者選定において、価格競争方式が71.2%と最も多く、プロポーザル方式21.1%、設計競技方式0.3%、総合評価落札方式2.6%、特命随意契約方式3.5%（「官公庁施設の設計業務に関する実態調査の結果2021」全国営繕主管課長会議、R4.5より設計者選定方式の割合を件数ベースとして筆者算出）となっていることから、西尾コンペの意義は特筆に値する。

国家的プロジェクトであったはずの東京国立競技場のコンペやり直しを巡って、日本社会における建築に対する認識の未成熟さが露呈した苦い記憶も残る中、西尾コンペではJIAと西尾市が協働し、選定委員（千葉学委員長、小野田泰明、伊藤恭行、加茂紀和子、手塚由比各委員の5名）、要綱、概算予算書、審査方法、参加資格、建設地視察会、二次審査該当者への謝金、ほか様々な点で検討・支援が行われてきた。2月27日の建設地視察会を盛況のうちに終えて、GW明けの提出期限までに総数152案と想定をはるかに超える応募が集まり、JIAと西尾市による基本的な要件チェックを経て、一次審査当日を迎えた。

当日は、まず各自10案を選定し、議論に移ることが提示・了解され、審査が開始された。審査委員は、最初の90分間、各自でチェックしていた案を確認しつつ、巡回しながら、10案を吟味していった。各委員よりの

選定後、第一段階は投票で絞り込みをし（4票から1票まで計16案が得票）、最終的には議論によって選定することの同意がなされた。以降、得票案を投影しながら、各審査員による議論が進められた。具体的には、「城あての可能性」（配置計画）、「出会いがカジュアルに生まれる」（動線計画）、「住宅スケールでの組み立て」（ボリューム計画）、「監獄的な形式」（平面形式）などと応援演説とツッコミが交錯した。

第二回目投票では、各自5案を選定することとして、計8案に票が入った。さらに、「中から外への拡張性」（内外空間の連続性）、「商業施設的なイメージ」（平面形式）、「土地の文脈の取り込み」（コンテキスト）、「売りがどこにあるか」（課題の設定）、「地震力の支え方」（構造計画）など熱を帯びた雰囲気のもと議論が進められ、最終的に5案が選定された。

審査委員らによる議論を振り返ると、「課題に対する問いの設定」と「それを乗り越える方法の提示」が問われていたように思う。選定された5社が7月4日に公表され、実際に若手建築家が占めたことは西尾コンペの成果だろう。9月9日の二次審査（公開）のプレゼンテーションでどの案が「てっぺん」を取るか、見逃せない。

### 一次審査 選定者

応募登録者名称（五十音順）	代表者氏名（敬称略）
株式会社ihrmk	井原 正揮
斎藤信吾建築設計事務所	斎藤 信吾
砂越陽介一級建築士事務所	砂越 陽介
株式会社タトアーキテクト	島田 陽
株式会社千田建築設計	千田 友己

### 脇坂 圭一（JIA愛知）

静岡理科大学  
西尾コンペ支援業務  
ワーキンググループ委員



最終5案を選出する審査委員



# 「羽島市役所旧本庁舎の利活用を考えるシンポジウム」開催

坂倉準三(1901-69)が、生家の残る岐阜県羽島市のために設計した「羽島市役所旧本庁舎(1959)」が、解体の危機にあります。

2016年に起きた熊本地震における庁舎建築の被災状況を踏まえて、羽島市は翌年2月に「羽島市庁舎検討委員会」を設置し、同委員会が同年7月に防災庁舎の新設を承認する一方で、旧本庁舎の今後のあり方を別途検討することを求めました。2021年11月には、佐藤総合計画・アートジャパンナガヤ設計・川崎建築設計室 設計共同企業体による防災庁舎が竣工すると、翌2022年2月には建築学の専門家が一人も含まれない「旧本庁舎あり方検討委員会」によって、その解体が決定されました(註1)。

2023年5月27日、一連の動向に対して、見学会・シンポジウム・関連展示 という3つのイベントからなる「羽島市役所旧本庁舎の利活用を考えるシンポジウム」が開催されました。地元市民団体「羽島あすなる会」が主催したこのイベントは、DOCOMOMO Japan、日本建築家協会東海支部、日本建築学会東海支部、坂倉建築研究所の後援によって、開催に漕ぎ着けることができました。日本建築家協会東海支部の皆様には、この紙幅をお借りして、主催者に代わって御礼申し上げ、その様子を報告させていただきます。

見学会では、鯉坂徹氏(DOCOMOMO Japan 副代表)と清水隆宏氏(愛知工業大学 准教授)の先導で、坂倉が設計した「羽島市民会館(1968)」を起点に、「羽島市役所旧本庁舎」を経て、彼の生家酒造会社が残る竹鼻町街並みの街歩きをしました。70人を超える参加者が、数珠繋ぎになって市役所周辺を練り歩く様子は、さながら取り壊し反対のデモ行進のようでした。

一方、シンポジウムと関連展示は、同市民会館の第1会議室で開催され、羽島市民だけでなく、関東関西方面からの方々を含む参加人数120人を超える盛況となりました。山田紘治氏(羽島市議会議員)による冒



見学会に詰めかけた保存利活用賛同者

頭のご挨拶に続いて、時田憲章氏(羽島あすなる会 代表)から、これまでの経緯を御説明いただきました。次いで、鯉坂徹氏(前掲)と大宮司勝弘氏(同事務局長)より、DOCOMOMO Japanの選定作品を中心に、それぞれ「DOCOMOMO Japan 選定建築」と「戦後コンクリート建築の利活用」と題する御報告をいただきました。また、三浦彩子氏(岐阜県文化財保護審議会委員、名城大学 准教授)より、「羽島市役所旧本庁舎の文化財保護法における位置付け」と題する御講演をいただき、2021年に改正された文化財保護法に則して岐阜県が整備した「岐阜県文化財保存活用大綱」における「旧羽島市本庁舎」の位置付けについて御報告をいただきました。さらに、山岡嘉彌氏(山岡嘉彌デザイン事務所代表)と筆者(日本建築学会建築歴史・意匠委員会委員、名古屋大学 准教授)は、2022年9月に提案した羽島市役所旧本庁舎の利活用に関する提案書を発展させた関連展示の内容について講演を行いました。

上記発表の後で行なった討論会では、会場意見が数多く噴出し、パネリストが事前に用意していた議論の時間がなくなる程でした。「昨年度市議会における取壊し決定後にこうした活動を行うことは、時既に遅し、民主主義に反します」という手厳しい

意見があったにも関わらず、会場から「もう少し頑張りましょう」という意見が出され、全体としては、保存利活用についての住民意識が共有されたようでした。わずか半日のイベントでしたが、多くの保存利活用の賛同者が集結し、盛況の内に幕が下ろされました。ところが残念なことに、会場に複数名の報道関係者の姿を見掛けただにもかかわらず、この様子が報道されることは一切ありませんでした。その上、翌月の市議会では、当該建物の解体費用を含む来年度予算に関する言及があったようです。2023年2月から始まった署名運動は2,500人を超え、現在も続いています(下記QRコード)。本誌読者の皆様におかれましては、一層の御支援と御協力を賜りたく存じます。

(註1) 経緯の仔細については、拙稿「SOS羽島市役所旧本庁舎」『建築ジャーナル』No.1344, 2023/07, p.47. を御覧ください。



羽島市役所旧本庁舎の保存利活用に関する署名運動QRコード

<https://chng.it/vRMYPn9C>

※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です

堀田 典裕

名古屋大学大学院  
環境学研究所 准教授



# わたしのとっておき

21

## 変わりゆく景観

昨年初夏のまだコロナも蔓延の頃に東京に行ってきました。

用事は東京へ行く口実のようなものなのですぐに終えて午前中に東京駅に



取って返しました。駅で見たかった一つは最近建築雑誌に載って話題になった、取り壊しが決まった前川國男氏設計の東京海上日動ビルディングで。

特に見たかったもう一つは、そのビルと東京駅との間にある丸の内仲通りの現在の様子です。

ここは三菱地所通りとも呼ばれる様に通りの両側はオフィスビル群が前面道路に対して整然と立ち並んでいて、もう10年以上も昔に東京国際フォーラムの方へ歩いて行ったのですが、夕方になるとビルの明かりも消え一寸街路樹が寂し



い通りになっていました。

その後そんな話を知人達としていたら、東京でもこの街並みに花やベンチなどを飾った明るいストリートに変える提案競技が行われることになったので知人も応募したいと言っていました。しかしその後どうなったかわかりませんが競技は行われたようなので今回行ってみました。

通りは10年前に通った薄暗い景観とは一変して、今では平日でも車を締め出し歩行者専用の通りになっており、街路樹周りは花やイス、テーブルなどに取り囲まれ皆が思い思いの姿でくつろいでいます。またビルの1階歩道側はヨーロッパの都心部のように夜でもウィンドウショッピングが楽しめる明るいストリート景観を見せています。



中西 暉 (JIA愛知)  
オウ環境設計事務所

## 自作自演 258

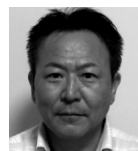
数字というのは私たちの生活の奥深く入り込んでいる。携帯番号、マイナンバーカード、免許登録番号、自動車のナンバープレート等々番号なしでは暮らしていけないと思うほど世の中は数字で溢れかえっている。

さて、みなさんはこだわりのある数字、好きな番号などはおありだろうか？実は私にとって数字=中日ドラゴンズの選手の背番号なのである。高校生の頃などは授業中に教科書のページ番号の横に選手名を書き、放課に選手名鑑で答え合わせをするなど今思えば何の足しにもならないことをやっていたりした。しかしおかげで選手名はよく覚えた。必然的に好きな選手の背番号がやはりお気に入りの数字となり、下駄箱やロッカー等は自然とその番号のものを使う。逆に自分に何か

## number

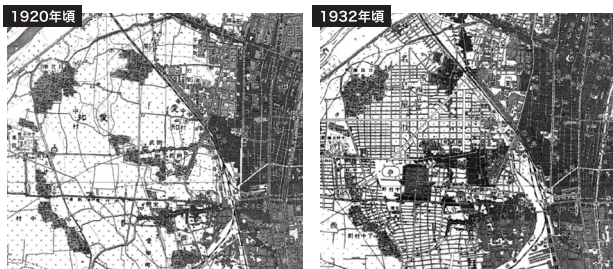
番号を与えられたりするとその背番号の選手を応援したくなったりもする。それほど数字=背番号なのだ。流石に今は暇つぶしに背番号自問自答クイズをやることはなくなったが、やはり数字を見ると選手が浮かぶ。少し前に始めた競馬もついお気に入りの選手の背番号で買ってしまったりする。当たると嬉しさ倍増ですが。

これから色々な選手が次々と活躍して好きな数字を増やしていつくれることを切に願います。ちなみに今は「0」「19」「20」「25」がお気に入りです。



花井 秀哲 (JIA愛知)  
丹羽英二建築事務所

1920年の今昔マップによると東海道本線の西側は田畑になっており、1932年の今昔マップでは中村区のほとんどが区画整理されている。庄内用水沿いの農地は、大正の頃から住宅や工場に変わったが、現在でも、

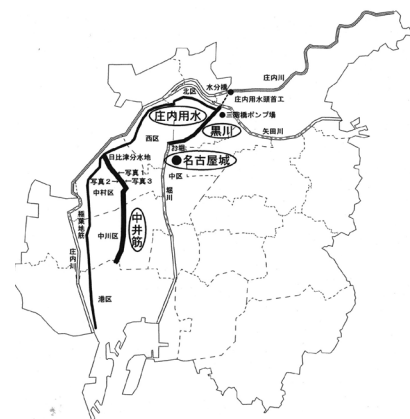


※出典:今昔マップ on the web (https://ktgis.net/kjmapw) より ©谷 謙二

庄内用水は黒川開削当時とほぼ同じ経路をたどり、水路総延長28kmの市内最大の農業用水であり、工業用水としても利用されている。

中井筋は平成3年から7年の事業で、日比津分水地あたりから烏森あたりまで暗渠化され「中井筋緑道」として整備が行われた。コミュニティ道路として活用され、散策路や植樹帯、水飲み場、小川などが設けられている。

緑道に設けられた四阿(東屋)は休憩場所として利用されているものと、四阿の前後に設けられた人工の小川に水を流すための機械小屋(水を循環させるためのポンプ小屋)として利用されているものがあるが、現在ポンプは使われていない。小川の流れていた時期もあり、用水の痕跡を残しつつ街に潤いを与えていたのであろう。



#### 【参考資料】

庄内用水 / 名古屋市土木局河川部計画課(平成4年3月)  
名古屋の河川 / 名古屋市緑政土木局  
河川部河川管理課(平成24年3月)

塚本 隆典 (JIA 愛知)

塚本建築設計事務所



写真① 中井筋緑道 四阿(中村区太閤通)



写真② 中井筋緑道(中村区太閤通)



写真③ 中井筋緑道 機械小屋(中村区太閤通)

## 編集後記

●11月に開催する「JIA建築家大会2023東海in常滑」に向けて、6月号から開催記念特集を連載しています。

間もなく申込受付も始まりますので、準備作業も佳境に入ってきました。本部の機関誌『JIA MAGAZINE』と東海支部機関誌『ARCHITECT』で内容を紹介し広報していますが、原稿締切から発行までにどうしても時間がかかるため、プログラム等の最新情報は是非ホームページでご確認ください(8月中旬頃公開予定)。機関誌では関係者の取り組み姿勢などを主に紹介していますので、是非ご覧いただき大会にご参加ください。

さて、今年のNHK大河ドラマ「どうする家康」のメイン舞台が東海地区なので、何か特集が組めないかと編集会議で話し合い、先月号から連続で寄稿「家康×原風景×富士山」を掲載させて

いただきました。富士山との関係で家康を見るのも実に新鮮で面白いと思いました。

(川本 直義)

●今号では、2つの記事の対比に興味を持った。

1つ目の記事は、川島氏による『「環境建築」その先へ』である。環境建築へのアプローチにおける2つの視点「環境ソフトによるシミュレーション」と「環境建築をサポートする社会制度整備」の重要性に共感を覚えた。昨今、提案において、その合理性を説明する環境シミュレーションが効果的であり必須となってきているが、スタディ課程において望む結果が得られないことに、しばしば設計プロセスの見直しを迫られる。多様な視点を踏まえた平面計画と、季節や時間ごとに移ろう自然環境による各々のパラメータデザインセンスが問われ、年々設計の難易度が増していると感じている。

2つ目の記事は塩見氏の寄稿「続・家康×原風景=富士山」である。私も故郷を離れて久しいが、ある時ふと匂いや光、風などの要素に故郷と

近いものを感じた時、無意識に「原風景」と重ね合わせ、「原風景」を求めていると自覚する。建築は土地の記憶・原風景を継承することで、人と建築を繋ぐことが大切であると思う。(降旗 範行)

## ARCHITECT

第419号

発行日 2023.8.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会プリテン委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

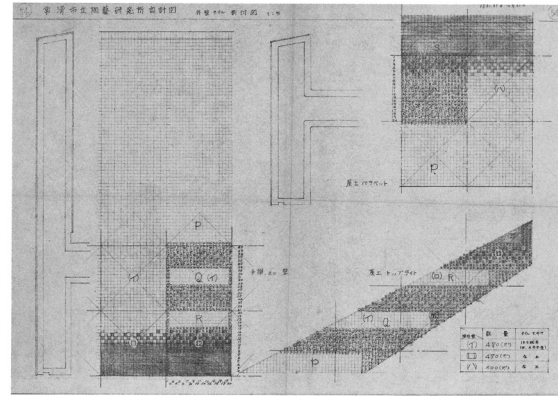
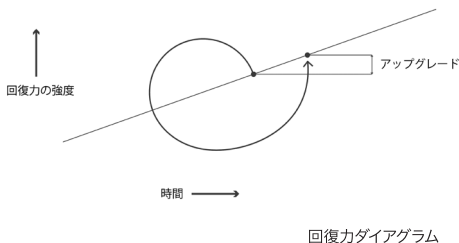
E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

# 同じ場所には戻らない円環をデザインする。 常滑を「紫」でデザインする。

JIA建築家大会2023東海 in 常滑、11月の開催に向けまだまだやらなければならないことが山積して、先が見通せません。当初より大会実行委メンバーに加わるように、とのご指示を受け、もちろん、愛知地域会の事業委員会として責任を持って承諾。懇親の席では、「アップサイクル」というキーワードが飛び交い、揃いのTシャツの話題になり、何か案は？と振られたので、「みんなが自分のお気に入りの(あるいは、要らなくなった)Tシャツを持ち込んで、デザインを「上書き」したらよいのでは？」と言ったところ、なりゆきで、デザイン担当ということになった。日頃、商店街のことで「デザインには労と金を惜しまず」が信条で、その成果も見えて来た。ここは頑張ろうとこちらも引き受けた。ただ、大会の全貌が明らかになるにつれ、作業量の広範なことにビビっている。これは、僕の知る限り彼(谷野大輔くん)に頼むしかないと思い、声を掛けた。「常滑いいですよねぇ」と快諾してくれたのは、本当に有難い。彼とは、僕が豊橋に戻って以来、早20年近くの交遊になる。いくつか一緒に仕事もしたが、とにかく、手掛けるデザインの範囲が広い、というか何でもやる。グラフィックはもとより、グッズやパッケージの企画やデザイン、なにより店舗設計などのインテリアデザインもこなし、そのどれもが秀逸で強いこだわりを持ったものばかりである。最近では、母校の大学で教鞭もとり、後進の育成にも尽力している。

さて、最初の作業は、メインビジュアルの提案とそれをチラシ、ポスター、PR動画にまとめること。「環る」というキーワードと何通りにも読み方があること。「アップサイクル」(ひと周りするが、同じ場所に戻ってはこ



当時のタイルの製品見本。  
この109列の「P」「Q」「R」「S」が選ばれている



出典：  
堀口捨己と常滑市立陶芸研究所(講演記録)  
INAXライブミュージアム発行

ない)スパイラルのような円環のイメージなどを伝える。「陶芸研究所」のトップライト屋根越しに夕やけの空を映した初期ビジュアル(チラシ)を見せた際、「堀口さんの陶芸研究所ですよ」と直ぐに応じたのにも驚いた。

彼は「陶芸研究所」の外壁を撮ったビジュアル案をもって来た。第一印象は、キレイだが、少し「抜け感」のようなものが足りないように感じた。同じ建築の最も印象的な「紫」という色使いを持ってくるあたり、流石である。彼の仕事は、いつもじわじわくる。

確かに「紫」は印象的ではあったが、浅井実行委員長曰く「常滑は夕日の街」である。初期ビジュアルの「抜け感」や「夕やけ」には少し思いは残った。メイン会場となる坂倉準三設計の「市民文化会館」を訪れるまでは――。

中庭(市民広場)を抜けた先のエントランス、大ホールのロビーのインテリアに、「紫」が使われている。特に天井は、床色の反射かと思うほど薄っすらと「紫」がかっている。これはきっと「陶芸研究所」への、あの壁へのリスペクトだと、堀口捨己が好んで使ったという「紫」を敢えてここでも使ったのでは？と思った。「紫」をテーマカラーとすると、確信した。

スパイラルの表現は、「アイソメのようなアングルで描かれることが多くて、面白くないから上からのアングルでいきましょう！」というので、賛成した。「渦巻き」がドットの集積による濃淡で表現されるのは、カラー印刷でなく、モノクロ印刷に代わっても濃

淡が損なわれな、という理由から。メインビジュアルでは、「紫」4色のカラコンモザイクタイルのグラデーションに馴染みつつ、はっきりと存在感を示している。実際に、動画で「渦巻き」が回転すると、上にも下にも向かっているように見えて、不思議な感覚を抱く。「渦巻き」のグラフィックは、様々なアイテムに展開される予定である。

こうして、比較的スムーズにメインビジュアルと「紫」をテーマカラーにすることにも賛同を得ることが出来た。これも「陶芸研究所」のもつ説得力なのでしょう。あるいは、「建築家たちを納得させるため」の彼の策略？だとすれば、やはりじわじわくる仕事である。このあとは、ホームページ、揃いの衣装、バッグ、会場案内サインやリーフレットなど、11月まで息つく間のない作業量が待っている。ただ、11月の常滑が「紫」に彩られると想像すると、少し心が躍る。

JIA建築家大会  
東海大会 in 常滑  
プロローグ動画



<https://www.youtube.com/watch?v=mpmtjkUy-MA>

黒野 有一郎 (JIA愛知)  
建築クロノ



図案屋の私が抱く古窯・常滑の印象は吉永小百合の「キューポラのある街」がしっくり来る。

あれは少年時代の夏の日。昼下がりにテレビをつけたらモノクロの映画。観るでもなく、観ないでもない時間が続いたが、見終えた頃に私は周回遅れのサユリストになっていた。自覚があるから覚えている。それは昭和が終わった頃。

映画で描かれたのは昭和37年頃の埼玉、鑄物工場の街。煙突が立ち並んで活気があるものの、時代の転換期を迎えて人々は苦悩し変化を余儀なくされてゆく。同じ様にここ常滑でも煙突から煙が消え、穴には土が充填されたようだ。路地の煙突の上に木が生えているのはこうした理由からだ、東野英治郎の風情を醸す老父は教えてくれた。



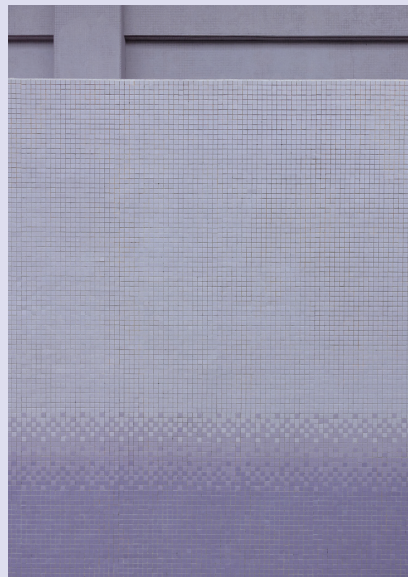
黒煙は緑に変わり、煙突は幹となって土地に根をおろす。

この街の丘、観光客で賑わう界限から少し離れた場所に、堀口捨巳設計の常滑陶芸研究所がある。紫のグラデーションが印象的なこの建築は映画と同じ頃建てられた。研究所が建てられてからほどなくして常滑市中の窯は次第に閉じられてゆく。こうした変化を実はある程度予見していたのだろう。残し伝えることを意図した研究所設立の背景も理解出来る。

常滑の開窯は平安時代末期に遡る。器や瓶、土管やタイルへ。時代が求めるものを作って来た。変化を厭わなかった事で、

常滑の焰は1000年消えない。平安時代から時の為政者の横槍だの、それこそジェットコースターの様な浮き沈みがあって、都度乗り越えた人々の営みがあることを想うと、途方も無い気持ちで満たされた。そこで「紫」なのだが、堀口捨巳が好きだったから使ったとか、色彩を良く用いたとかいう記述は、図案屋としては何だか引っかけ。色彩はクールなメディアであるからして、伝達速度が遅い。しばし対峙することにした。

紫の起源は紫草そのものを指す言葉。モノの名称として現れた。平安以前は色を表す言葉はうんと少ない。白・黒・青・赤程度で、例えば青に含まれるのは赤紫から緑まで幅広い。様々な色を言葉として用いるようになった理由の一つとしては、染色技術の向上によって様々な色を区別する必要に駆られたからとも伝えられるが、図案屋はもう少しロマンに浸りたい。そこで平安和歌から「色彩語」の存在に行き着く。それまで曖昧としてた色に、文学が名前を与え、人々が共有出来るようになった。何と優雅なエピソードであろう。こうして「概念の色彩」を手に入れたことで表現が豊かになる。藤の花や雲の色を紫と表す様になり、紫煙は煙草だけでなく「もや」も指すようになった。セントレアが霧に見舞われるニュースも耳にしたことがあるから、これは地理的なこともあるかもしれない。



陶芸研究所の外壁

当初は紫のグラデーションを、煙が空に向かって霧散する様子。と思っていたがどうも違う。下から上に向かって薄くなって、屋根の端はまた濃度が増してゆく。はたと気がつき、モザイク状の玉葱がふんだんに溢れるコストコのホットドッグ片手に薄暮の伊勢湾に立ってみた。

伊勢湾と空との関係性だ。ムービーの50秒辺りをご覧ください。

この紫のグラデーションは開窯の頃と変わらない「固有の風景」を指すのではないだろうか？差し出されたタイルの見本帳から選んだとしても、あれは平安の紫だ。

人は「神秘化」することで対象に蓋をしようとする事があるが、紫のグラデーションを見つめていると、「一時だけを切り取って見るな」と囁くようだ。忘れがちだが、我々は長い連なりの中のほんの一瞬にいる。変化が求められる昨今、実はいつの時代も人は不定形で不確かな存在。なにも今に始まったことでは無い。デリダ的に言えば時間経過の永久的延期を写真でなく色彩で試みようとしたとも取れるし、「それは、かつて、あった」とはバルトの言葉だが、「いまも、ここに、ある」のだ。つまり、役目が来た時にだれかが手をかける記憶のトリガー。焰の保存装置。堀口は色彩にそれを託したのではないか。

こうして、図案屋の行き過ぎた妄想はあちこち環って帰還した。

めぐる、かえる、まわる。

まったく良い大会テーマだと感じて、ピジュアルは紫一辺倒になった。

全国各地の建築家の皆さん、2泊3日で1000年の旅。紫を目印に、どうかお気をつけてお越しください。

#### 経歴

1974 千葉県八街市生まれ  
1999 名古屋芸術大学大学院美術研究科修了  
2000 フォノンカフェルーム・フォノンデザイン開業

受賞歴/JCDデザイン賞 シルバーアワード  
都市デザイン文化賞 他

現在/(有)ノクトルーノ フォノンデザイン代表  
名古屋芸術大学芸術教養領域・名古屋芸術大学大学院  
デザイン研究科 非常勤講師



谷野 大輔

フォノンデザイン